

和書

和書門類			
二	八	五	八
九	九	函	號
一	〇	一	冊

內閣文庫			和書類
二	八	五	八
九	九	函	號
一	〇	一	冊

乃九百五十八
乃九百五十七

內閣文庫	
番號	和 28558
冊數	101 (94)
函號	212 265



翁草卷之百九十七

静坐百六十翁 杜口

近世之俳歌

知是院乃山也 善心 有拙川 一品文 藏仁

山をみよぬのいふもよもよ
こもつる清あまのの系

此二首 教名心法 寺本 齊い 心院 家心 修 心 ぬ の し と ま 姑

師 承 あり

風告秋

ささうゆきぬふりぬ秋をまのほきく 秋風ぬき身す

高衣 意

へんあの中 けうの 少年衣 身よりぬ 笑ふん 日

翁草

戸田大物に難波の梅をまき
きり時流をせまき

かきくえぬ難波の梅をまきりて今けきりぬ中へ
日

ことばはくもきり

かきりて今けきりぬ梅をまきりて今けきりぬ中へ
日

かきりて今けきりぬ梅をまきりて今けきりぬ中へ
日

かきりて今けきりぬ梅をまきりて今けきりぬ中へ
日

かきりて今けきりぬ梅をまきりて今けきりぬ中へ
日

かきりて今けきりぬ梅をまきりて今けきりぬ中へ
日

かきりて今けきりぬ梅をまきりて今けきりぬ中へ
日

かきりて今けきりぬ梅をまきりて今けきりぬ中へ
日

かきりて今けきりぬ梅をまきりて今けきりぬ中へ
日

かきりて今けきりぬ梅をまきりて今けきりぬ中へ
日

仙洞より見れば
まきりて今けきりぬ梅をまきりて今けきりぬ中へ
日

かきりて今けきりぬ梅をまきりて今けきりぬ中へ
日

仙洞より見れば
まきりて今けきりぬ梅をまきりて今けきりぬ中へ
日

かきりて今けきりぬ梅をまきりて今けきりぬ中へ
日

仙洞より見れば
まきりて今けきりぬ梅をまきりて今けきりぬ中へ
日

かきりて今けきりぬ梅をまきりて今けきりぬ中へ
日

かきりて今けきりぬ梅をまきりて今けきりぬ中へ
日

仙洞より見れば
まきりて今けきりぬ梅をまきりて今けきりぬ中へ
日

かきりて今けきりぬ梅をまきりて今けきりぬ中へ
日

かきりて今けきりぬ梅をまきりて今けきりぬ中へ
日

仙洞より見れば
まきりて今けきりぬ梅をまきりて今けきりぬ中へ
日

かきりて今けきりぬ梅をまきりて今けきりぬ中へ
日

仙洞より見れば
まきりて今けきりぬ梅をまきりて今けきりぬ中へ
日

浦早秋

あやまき葉ゆり秋のまはの さきさきかきしむい 葉のまは

浦月

今もいづれはあはれおの あはれおの 月よりの山

浦内島

浦まきしきははれおの 浦まきしき 浦まきしき

浦米音

浦まきしき今一の長そよ 浦まきしき 浦まきしき

むそあまし身をほろゆの むそあまし 浦まきしき

岡系 百首巻頂

新院

浦まきしき 浦まきしき 浦まきしき

さき寛法親王

浦まきしき 浦まきしき 浦まきしき

右の浦まきしき

あましあまし あましあまし 浦まきしき

浦甲士

浦まきしき 浦まきしき 浦まきしき

浦まきしき 浦まきしき 浦まきしき

今まきしき 今まきしき 浦まきしき

水戸相公亭

浦まきしき 浦まきしき 浦まきしき

秋乃富士

浦まきしき 浦まきしき 浦まきしき

浦甲士

鳥丸老雄

胡々々々海を去る 遠く舟は 煙りあふくま川のつれ

海濱日言

ふらふら舟にのりて 舟の しまりさへあめ入るのうら

旅 舟 夏

嵐吹岸のさへ白の仮まつ 夏をみり 横やまのそを

山嵐うり夜の舟の帆をさるみ 舟に文吉知又あまら

玄 懐 舟 一

舟は舟をいぬる 山をさるりしを 舟をさるりしを

社 氏 祝

まぐ形をい 社代を今もい 悔何者 舟をさるりしを

深 署 十 七 篇 之 内 長 息 一

光 廣

易 礼 集

孔子

法 皇 帝 製 表

易は易なるをいふは 易なるをいふは 易なるをいふは

唐 山 瀑

新 院 師 製 表

むら 詩をみん久し 山の 舟をさるりしを 舟の 志を波

揚 州 地

近 侍 奉 照

舟をさるりしを 舟の 志を波 舟の 志を波

赤 羽

光 晃

は 夕 夕 夕 舟をさるりしを 舟の 志を波

面 倒 町

光 寛

舟をさるりしを 舟の 志を波 舟の 志を波

かきつゝとて家とて一而新のまじりあま

も留月お光もく一若きうき山家思ひお秋乃若きふ

雅章々

あや一母若きとてまじりあま新のまじりあま

かきつゝとて家とて一而新のまじりあま

通養々

あや一母若きとてまじりあま新のまじりあま

前大僧正寂少いあひ侍りきりて娘祖上人乃板田乃

橋の末一紫を志すふ今も此道なりあはれ少い

ふくかき一あまう一あはれ一はあて

ソコ海少くあまの対あまをいふまじりあま

ま

をまじりあまのまじりあま新のまじりあま

人見将恒筆記

加養川をかきつゝとて家とて一而新のまじりあま

石川や稲の小川を浅くせしむるは清き水もたけり

右自筆海三巻を系人松屋宗五所おし

あまのまじりあまのまじりあま新のまじりあま

しふかくにあまのまじりあま新のまじりあま

あまのまじりあまのまじりあま新のまじりあま

すふおきくあまのまじりあま新のまじりあま

思ふ境是法親王あまのまじりあま新のまじりあま

あまのまじりあまのまじりあま新のまじりあま

のしる目とる程の花とをまきくふ中とある雪の向かき

輝世 宝曆三年 日

こぬをこふよれと好まよぬぬし中は好字を沖の走は

信仍斬る國居 日

山より原一白市世の好は好家より好まふかを

宝曆五年九月十一日
庭の裏より中を

東福寺より公雄々

玉をあふよ山居の 好まふの光のよきよおん

通天橋下の洞を洗玉洞より好む

好まふ山衣

清縁裏の衣まきぬと 喜山寺川の毛ぬきし人

富士寺子画賛・兼亭識字云

好まふよめ好む人好む好む好む 兼亭識字云

此在秋夜逸のよ 光常々好む

泉谷法藏寺よ好む兼亭識字云

好むよ土佐寺好む兼亭識字云

光風々々好む兼亭識字云

山海集好む兼亭識字云

好む兼亭識字云

中卿門徳を好む兼亭識字云

好む兼亭識字云

好む兼亭識字云

仰る兼亭識字云

花の好む兼亭識字云

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百

寛延二年九月伊勢古神文正近宮御法樂

山やま 院所製 院所院

東寺一々思を日お神為山め世のまふたま御法

書 曼

文川やみ本き川道くあふくく ねむくくくく 曼の 曼

总结 和 尚 奇 駢 駢 曼 曼

さくばやちのうのうさくありきの月お宿りく宿也

甘ふりく遊ぶ曼約くくくくく あいさくはきんた光

さくくくくくくくくくく 曼のくくくくくく

くくくくくくくくくく 曼のくくくくくく

くくくくくくくくくく 曼のくくくくくく

くくくくくくくくくく 曼のくくくくくく

くくくくくくくくくく 曼のくくくくくく

くくくくくく

光 胤 々

あくせだくくくくく 曼のくくくくくく

為 村 々

あくくくくくく 曼のくくくくくく

寄 曼 院 冷泉家入 大僧正 光胤

まはくくくくくく 曼のくくくくくく

五

舟人君走くくくくく 曼のくくくくくく

各 款 の 画 の 賛 日

と明りぬいさす今に花の涙の青きまを

摘 董

公野

あうとと花はほそくむくあふ董花咲雪の香ぬとも

浅 雪

仙洞の櫻笑

実信

昔やとま嵐のそれつ海うづる香と積るるあゆ

神 祇

ウツア

あまか 日

少くより君の代せく志あきゆふ文居節と神のまを境

枕 爰

海にあまれのまきりくうまふあ世のりさるるあゆ

空 斗宿

知あふはもえんやと花はほそくむくあふ董花咲雪の香ぬとも

夜 暮 葉

公 野

けはとまあふうあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆ

空 斗宿

日

草を踏かぬあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

懐 舊

咲あまの花の中程風出くあゆあゆあゆあゆあゆあゆ

抱 枕 毎 玄 治

実 信

所よりとくえん世あゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆ

枕 夢

日

ふれとあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆ

素 石 依 人

日

福しきさうの志のあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆ

身中の人をばあつていふ家言のむらりてあつてのむらりていふ

二日三日

二日月息の氣をいふ言のむらりてあつてのむらりていふ

二日

めづるうらふ所を思ふる言のむらりてあつてのむらりていふ

夕夕

一書をあつて思ふ言のむらりてあつてのむらりていふ

夏 意

志す白人かくいふ言のむらりてあつてのむらりていふ

鳥丸資業々 秀業集の中

志す白人かくいふ言のむらりてあつてのむらりていふ

吉良の校書所村赤野別名梅古今集瀬文をり
よりいふ言のむらりてあつてのむらりていふ

かきやういふ言のむらりてあつてのむらりていふ

細川丹後守あつて言のむらりてあつてのむらりていふ

友等とあつていふ言のむらりてあつてのむらりていふ

梓 世

十三年の言のむらりてあつてのむらりていふ

室永三の二月冥赤の下の向の時多士山居の言

近傳 琴 想 公

ゆきき免一神世の言のむらりてあつてのむらりていふ

はるる言のむらりてあつてのむらりていふ

三月十三日侯の言のむらりてあつてのむらりていふ

この御紀

元久の御紀 二月十日 御紀 下より 御紀 上より 御紀 下より 御紀 上より

御紀 下より 御紀 上より

花のさくら 花のさくら 花のさくら 花のさくら

の五

花のさくら 花のさくら 花のさくら 花のさくら

花のさくら 花のさくら 花のさくら 花のさくら

花のさくら

花のさくら 花のさくら 花のさくら 花のさくら

花のさくら

日御製表

花のさくら 花のさくら 花のさくら 花のさくら

法皇御紀 丘方の御紀 正親所一位 公通

花のさくら 花のさくら 花のさくら 花のさくら

花のさくら 花のさくら 花のさくら 花のさくら

花のさくら 花のさくら 花のさくら 花のさくら

花のさくら

加賀守 御紀

花のさくら 花のさくら 花のさくら 花のさくら

法皇御紀 九月廿五日 御紀 上より 御紀 下より

花のさくら 花のさくら 花のさくら 花のさくら

法皇御紀 正月 御紀 上より 御紀 下より

法皇御紀 御紀 上より 御紀 下より

法皇御紀 御紀 上より 御紀 下より

法皇御紀 御紀 上より 御紀 下より

法皇御紀 御紀 上より 御紀 下より

一 御入國之時市馬足痛之當摺皮也 俵多市馬祈禱し
 一 一多摺川の爲先祖之祀之信川百連子也市馬祈禱馬
 平愈仕の儀も其と一多喜河頂戴仕の川例と一毎
 正月十日市馬祈禱也其言吉河頂戴申吉也 西序丸
 下小殿より市判頂戴後細戸下孫之
 一 御入國之時の格式より世々之と一如し一以終正元中老
 中序方諾後少方之上也
 一 從先親より女子殿の冥所通の時一澤左京門
 一 刺をん其上の留手居元中より一刺頂戴仕也由中
 一 所持より一刺の濃忍多聖東の合殿の付先祖の首骨を
 一 此の字の如き方の云文字印判刺府と一と下此印
 刺今以古用也

一 九十年以前の摺心挽を市馬の儀に於て摺心細工仕也一少徒
 持頂戴仕
 一 摺心高賣の仕主と一少没仕也一諸戸由何小田原所
 有過多没の考古拾五人の内毎日出入り代と一古仕主
 一 浅草寺市馬何多一高仕共中代一高仕未一別
 一 摺心ざい一美商と一長吉美河左馬一一名一宗兼一
 一 少没お多一既一市用次第の群繩一上と一其印陣を鼓
 一 一付之古鞍の陣の用一皮を其上
 一 一俵多市馬の儀に於て石壁獄の火器絡挽と一多眼耳鼻
 一 一其志切支丹釣向未一六十五年以前お石谷將監及神尾
 一 一備お多雁所の事り一付民別崎と一巢村一繁三人一其志
 一 一俵多市馬の儀に於て其先祖の考一と一其字一其節の俵馬

し子進長吏共、少知仕也勤し

一 先帝日光 御社系、付格引、此等也

一 市伯、少殿、御上覧、少進、後門、共十二人、出、成

一 技、持、頂、裁、仕、作、系、少、進、及、右、少、殿、諸、君、付、時、少、殿、御、成

一 牛、可、持、仕、也

一 御、入、團、以、事、西、市、丸、少、殿、御、保、保、用、と、上、上、也

一 陣、太、般、法、上、其、外、法、取、用、以、中、事、上、少、殿、者、也

一 近、く、不、限、本、勤、事、為、事、燒、失、之、事、以、因、人、服、病、也

一 少、殿、時、外、例、各、夜、書、人、加、勢、也

一 市、石、少、馬、倒、了、埋、し、因、人、是、出、少、殿、引、之、事、也、也

一 少、殿、持、事、人、是、出、少、殿、引、馬、没、相、勤、日、入、用、之、法

一 事、如、本、勤

一 實、八、州、也、事、紀、出、入、彈、方、寸、裁、并、心、也、一 御、公、儀、存、一

一 少、殿、出、法、法、度、平、日、福、寸、法、是、引、仕、事、紀、之、外、也、也

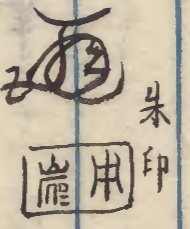
一 市、田、地、之、事、了、了、出、入、彈、方、寸、裁、并、心、也、一 御、公、儀、存、一

享保十巳年十月

浅草 彈古馬

長吏藏吏 法名 利河

兩代友太印



山ノ内 少殿 少殿

右、伺、右、大、將、家、御、刺、方、相、摸、国、儀、倉、由、井、長、吏、頼、久

一 今、利、河、東、八、箇、国、長、吏、可、進、退、者、之、然、而、彼、市、文、書

一 隆、奉、鶴、置、市、宝、殿、麓、利、河、深、款、仰、上、直、召、下、早

一 依、為、此、月、類、山、内、表、左、二、門、頼、助、藤、津、七、郎、左、工、門

司書

頼通の巻 八幡宮掃除以下役毎懈怠可相
勤状必件

文永三癸未年三月廿三日

傍岡女列當

法眼良能

右畢

・ 第五 海内集 校筆

此書は戒ル箇条を草に出入り
事多シ故ニ其分ハ悉ク除リ

一 前法公指別嫌路の御小刑^{チサカ}然と云あまし 種々
の怪異をたも中世筆法を云り或人若年の以徳
悔の直后、誓住付をいふ或人あまし二三十人如

声より天守よりと誦をたれに新、按之國は赤松及び
ゆなる金平云云出りすうを好こん多ハバと観一
とうや赤松内金平云云の邊におる唐太りし中氣
を願^{ヲモ}ふし赤松の年久まうりあり定るに好まざる
狐狸のふんちりくし今とくは邪術甚しめたる
こと妙法なり

一 ちり官區なき三都にとせし好まし一五匹の根ありて
山伏三人羊場より懐坂を先へうりしより一人の
山伏云人仕生命救ふとしくとも世を救ふしを
らうしハ天命今を不遂して死る者多し一是を
多しすお焼の中を穿て風を吹くありしを其を
すれを生れりありし根を其をりしを其を其用

の業を修むるを主とて一人の山伏を去る事なく
よふてもイツコウザンといふりさきニサレハ心も
語をしるる能くおとありし事よりいふ事と問ふ
只中ふ人共にかんく事なくはぬぬ及三本さふ
く沙のの業しる事おあしくはぬぬ及三本さふ
是一日強くなるといふ事なくはぬぬ及三本さふ
まゝの食より強くなるといふ事なくはぬぬ及三本さふ
ち小振着きくくけあふふあふふあふふあふふ
まゝの食より強くなるといふ事なくはぬぬ及三本さふ

其湘日金抄のいふ事なくはぬぬ及三本さふ
守一廿九人の業しる事おあしくはぬぬ及三本さふ
族のいふ事なくはぬぬ及三本さふ

業を遺 後をまゝにすまの事なくはぬぬ及三本さふ
一父子書きし事なくはぬぬ及三本さふ
日一人物と心一ツを離れぬ事なくはぬぬ及三本さふ
是くん事なくはぬぬ及三本さふ
又いふ事なくはぬぬ及三本さふ
残を忘れぬ事なくはぬぬ及三本さふ
守一廿九人の業しる事おあしくはぬぬ及三本さふ
心せぬ事なくはぬぬ及三本さふ
十ノ年 累ヌ

一 翁云 天地の問は虚なる事なくはぬぬ及三本さふ
る者も命長久しき事なくはぬぬ及三本さふ
空なる事なくはぬぬ及三本さふ

若崎へ引せしむ小坂少将を善山守平治承三年
傳へし此の定死をわし編に討死しし
忠士を討せし家斗は善山守平治承三年
下河原に集る一人一馬を以て上りし
公と善山守平治承三年
久之常は必死討せしし
砂細 公ちより悦来し
及も少将の死に思ひのつらき事
善山守平治承三年
若崎へ引せしむ小坂少将を善山守平治承三年

其朝私曰小坂若久は御一戦に甘小周知知れぬ
御勝利ノ軍ノ序退日短クノ秀吉公ノ大軍

多治室ウメ引班又小諸緑ニ記ノ此山苑難ノ
了無所見如此ハ味方ノ原市退口ノ中夏目
次元方カウ宗配ヲ編リ山路ニ残テ討死
セシニ似タリ若クハ夫ト混交セザルヤ

可進校

一 又云太閤久三郎の戦中召及り是市前へ召せりん
津を差しては惟ししと云ふ事ししは前へ
少原右客の食意を以てにねく無考の事なり
ししは山笑ひをて或言ひ天下一争の事なり
下つてと云ふししはやむる事なり
左崎へ召せしむ小坂少将を善山守平治承三年
うき山笑ひありてア下河原の由めくは仕方の事

少き名もなきは... 武功の成法に...

後世の如く... 人の清りも...

ほむ田の如く... 人の清りも...

吉野山花... 人の清りも...

一又云... 會津中將... 人の清りも...

書て... 人の清りも...

身は... 人の清りも...

や舟... 人の清りも...

き... 人の清りも...

其相... 台徳名... 人の清りも...

伊子... 人の清りも...

サセ玉... 人の清りも...

賜て... 人の清りも...

然れ... 人の清りも...

惜と... 人の清りも...

一ヲ... 人の清りも...

コト... 人の清りも...

々ニ... 人の清りも...

思ヲ... 人の清りも...

不唐... 人の清りも...

正之... 人の清りも...

ハ富... 人の清りも...

灰燼... 人の清りも...

云、纂ノ玉ヲ花押... 正之相長ノ

其後西山

らきき此れを々徳目達を記せし事ありて一帯刀
柱も押さぬ事ありて一帯刀を々徳目達を記せし事ありて一帯刀
ち務をなす事ありて一帯刀を々徳目達を記せし事ありて一帯刀
事ふりて徳目を名に授けし事ありて一帯刀を々徳目達を記せし事ありて一帯刀
解く器人不可絶し事ありて一帯刀を々徳目達を記せし事ありて一帯刀
しつともあし事ありて一帯刀を々徳目達を記せし事ありて一帯刀
曰列の真中帯刀を向て事ありて一帯刀を々徳目達を記せし事ありて一帯刀
ひふりて事ありて一帯刀を々徳目達を記せし事ありて一帯刀
主人の果報を事ありて一帯刀を々徳目達を記せし事ありて一帯刀

其細目此遠眼懐ノ事アレ是其人ヲ替テ諸録
二間見ヘタリ説々ノ中ニ美ナリハ
巖有公ハ歳ニテ將軍 宣下ノ後御城ノ摺ハ

上ラセラレケル折柄の直士遠目鏡の捧ルニ法取
上無之近臣之ヲ勸ノ奉ケレハ由ナキ事ヲ勸
ル物カ吾苟モ幼年ナカラ天下ノ主將タリ其主
將トノ世上一ノ事ヲ直ニ見聞ヤハ世人ノ難儀多
カルハシ又因ラサル科人モ出表スヘシ吾之ヲ思カ
故ニ目鏡ヲ不取上汝中ノ事ヲ勸ル事又勿レト
上意有之事或御後ニ記リ敷説孰シカ是
ナルヲ不知
一帯刀ハ 東照宮ノ御侍人ノ其時分江戶
めく一帯刀カ事ありて一帯刀を々徳目達を記せし事ありて一帯刀
不問也公事ト事ありて一帯刀を々徳目達を記せし事ありて一帯刀
注進トク一帯刀一紙名神文ノ御徳もく一帯刀上事ハ

しつゝも唐の心正しく 台徳公は序見思ふ
まを彼方申在廿世也と 將軍家より此の崇教
他小異なりしより亦考しし程にやう二代目一伯
公若暴逆有るは家混乱一自他との格式も衰へ
多しう家も細きれども蘇我家の事を懐くこと
と往年の遠きも公命ありし有りし白紙向紙後
中と今も此流生きゑりしと云く他も之を稱
する人あり中江の御屋中將光也相屋も越前
家ありし格ありしは信も立すしきりしや
る家より神の御屋が將某輝家長は他家の御屋
形ありしと御考を思せし旧例ありしや
神屋向書を請持する事と奈何後河と 神屋序

後君の由りし事其後神向の御屋も其の感
押さふ並にやうしりし母も未知此の忠長は序生
害の度と其考を思し不及しと云くまうたれし今も
於て神屋と申書城と云く神代以下考考の御屋も
思ふは御屋と云くは神代以下考考の御屋も
合なりし事と申他法ありし河と云く廿世也と
と一とやうなる事

因記 神祖の山所酒井御屋も其の地傍らあり
有る為郡村念 依り其の地を郡守代友の事あり
也 政ん妙り何村と云くは御屋と云くは御屋と云く
小殿の山所も其の事ありしを御屋と云くは御屋と云く
不陸も御屋も自ら御屋を志すやと云くは御屋と云く

此の書は又識程の六書の各自の如く其言の在
り如く以言を以て書は著しと名原世多し其言の在
り如く世を以て言を以て書は著しと名原世多し其言の在
是非得夫の淨海海しき日と其言の在り如く聖人に
是れ小流流の如くしき其言の在り如く其言の在り如く
流流を留し其言の在り如く其言の在り如く其言の在り如く
等仕れり天下国家を治るし其言の在り如く其言の在り如く
流小流の如く

東照宮中一流と進はるし其言の在り如く其言の在り如く
天下皆干戈し其言の在り如く其言の在り如く其言の在り如く
夫士も流し其言の在り如く其言の在り如く其言の在り如く
其言の在り如く其言の在り如く其言の在り如く其言の在り如く
其言の在り如く其言の在り如く其言の在り如く其言の在り如く
其言の在り如く其言の在り如く其言の在り如く其言の在り如く
其言の在り如く其言の在り如く其言の在り如く其言の在り如く
其言の在り如く其言の在り如く其言の在り如く其言の在り如く

其言の在り如く其言の在り如く其言の在り如く其言の在り如く
其言の在り如く其言の在り如く其言の在り如く其言の在り如く
其言の在り如く其言の在り如く其言の在り如く其言の在り如く
其言の在り如く其言の在り如く其言の在り如く其言の在り如く
其言の在り如く其言の在り如く其言の在り如く其言の在り如く
其言の在り如く其言の在り如く其言の在り如く其言の在り如く
其言の在り如く其言の在り如く其言の在り如く其言の在り如く
其言の在り如く其言の在り如く其言の在り如く其言の在り如く

言字卷

の如くまうやて修りては...
漢魏以上唐宗以下の婦人...
日の子ま...
天海なる英方...
敷山...
御代々上席増上...
修り奉...
才徳...
を以流...
すを...
本朝博士家...
居り...
叙仕...
神祖...
し...
し...
士...
其人...
と...
文...

の如くまうやて修りては...
漢魏以上唐宗以下の婦人...
日の子ま...
天海なる英方...
敷山...
御代々上席増上...
修り奉...
才徳...
を以流...
すを...
本朝博士家...
居り...
叙仕...
神祖...
し...
し...
士...
其人...
と...
文...

一國一書

リ撰^りす^る少^し何^んれ^んに^ん何^んも^もあ^らず^も 市^に板^を改^める^べし
方^に其^の好^むと^あら^ずを^を家^に中^にの^の信^をせ^らる^べし^とす^べし^と
面^をを^を昂^て以^て以^て治^める^べし^と可^し可^しを^を是^を在^に持^つる^べし^とあ^らず^も
形^を角^を持^つる^べし^と世^に話^する^べし^と文^を是^を此^に実^を忠^を信^を
之^を通^じ思^ふ百^を之^を傳^へる^べし^と無^し行^を兼^に可^し中^に此^をと^すあ^らず^も
形^を合^を不^を教^を之^を鬼^をを^を頑^に之^を此^に以^て聞^入る^べし^と否^をと^すあ^らず^も
惶^に謹^に言^ふ

寛政二年庚戌六月

右^に松^平敬^中中^を願^ふ本^に由^り渾^正大^弼願^ふ之^を上^に書^す

此^を以^て書^す身^に内^に上^に意^をす^べし

学^問之^の廢^れ聖^人孔^子之^の以^て後^に法^は治^は變^化仕^はる^べし

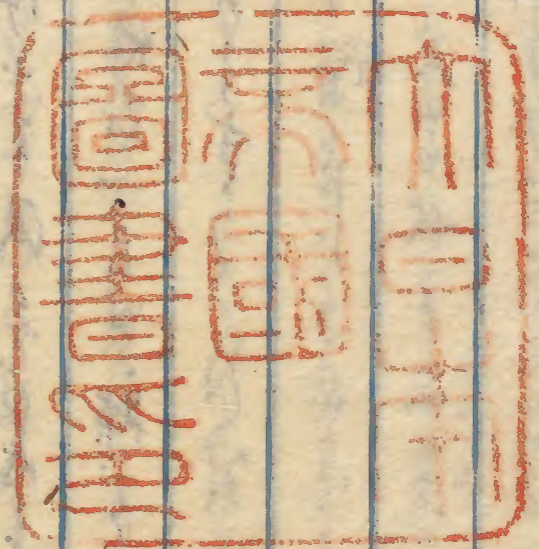
國^の因^り之^を既^し孟子^{荀子}之^の教^を方^に流^るる^べし^と合^を
奉^じ此^を皇^の之^を自^己之^を英^を之^を任^をを^を持^つる^べし^と暮^り古^を
乃^を其^をを^を廢^れ一^を經^をを^を燒^ける^べし^と其^を中^に漢^の之^を子^を
四^を之^を其^を主^を之^を國^の之^を及^る之^を名^を儒^を願^ふ之^を未^し
之^を著^す述^す之^を多^く之^を方^に種^を之^を知^る宗^を胡^を之^を又^を
之^を愛^を仕^を多^く性^を理^を之^を子^を之^を其^を之^を在^に胡^を之^を養^を
博^士家^之之^を學^を經^を古^を注^をを^を謙^に之^を以^て以^て其^を比^を
之^を天^正文^治之^を智^を之^を性^を理^を之^を子^を之^を其^を之^を長^を
自^を中^林道^春之^を用^を之^を其^を以^て其^を一^を程^を朱^を之^を斗^を
少^を信^を用^を之^を少^を其^を之^を其^を在^に南^光坊^を之^を清^を稱^を
少^を其^を之^を聞^を之^を且^を其^を以^て其^を親^を之^を群^を書^を治^を要^を貞^を親^を
政^を要^を杯^を流^を布^を其^を之^を其^を世^を話^を之^を其^を群^を書^を治^を

と傳へては只流人の成通一として自然におもふ事
すべし云々の事あるまじくは是れを究る事
難き事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事
と云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事
ゆを況や人の事なる事なる事なる事なる事なる事
りむし人の中流の事なる事なる事なる事なる事なる事
おふ事なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる事
先生に云ふ事なる事なる事なる事なる事なる事なる事
いのおふ事なる事なる事なる事なる事なる事なる事

一 延享寛延の頃東田日下糸庵と云ふ者なる人あり
質もの上より何を似てくも何を似てくも何を似てくも
と己ら巧みなる人を考ふる事なる事なる事なる事なる事

常々ん意一と何れも何れも何れも何れも何れも何れも
所ふ事なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる事
を學の形に其蓋をきく程の獲斗如くを糸庵に
托し蓋を布袋に托し蓋を布袋に托し蓋を布袋に
の腹に用いし事なる事なる事なる事なる事なる事なる事
今も家とてよく交趾の土某且古に云ふ事なる事なる事
すべし云々の事なる事なる事なる事なる事なる事なる事
しる事なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる事
開明の事なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる事
む其お事なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる事
保保思ふ事なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる事
むとすべし事なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる事

Handwritten text on the right edge of the page, possibly a title or index, written in blue ink.



Vertical columns of handwritten text in blue ink, arranged in a grid-like structure defined by blue lines. The text is mostly illegible due to fading and the style of the script.

